

初心は何だったのか？

中村 薫

経済産業省 産業技術環境局長



約2年前、旧工業技術院本院および15の研究所と計量教習所は、一つの機関として独立行政法人化し、新たな出発をしました。私は、その直前の2年間、ちょうど皆が新しい組織のあり方を活発に議論していた時期の工業技術院総務部長というポストでした。当時、工業技術院のみならず国研は様々な意味で曲がり角にあり、産業界からも距離があり、地盤が長期的に低下してきていたことは覆いようのないように思えました。某院長経験者が、「このまま10年やっていたら工業技術院は何処からも見捨てられてしまう。」と独白していたことが印象に残っています。

当時、各研究所の若手から成るプロジェクトチームで活発な議論をしてもらいましたが、小生の役目は、そのメンバーに任命の辞令を手交するところまででした。皆、危機感と、一方で“やりように抛れば理想の研究機関が作れる”“2,500の研究者の能力を最大限生かすことができれば、世界的な研究機関を作れる”との意識がありました。

今日、産業技術環境局長として、部外の方から産総研は変わったとの前向きの評価を聴くことがあります。リップサービスかも知れませんがうれしい気持ちになります。ただ世界的研究機関の名を得るまでには至っていないようです。しかし、東京大学ですら、その前身の一つは「昌平坂学問所」の名でアジアの片隅で朱子学を教えていたにすぎません。自己変革によって新たな地平を開いてください。現在、産業のニーズが声高に叫ばれておりますが、これは、従来のような基礎重視の美名に対するアンチテーゼの面もあります。産業として必要であってもリスクが高く、企業でできない領域は重要な分野です。産業ニーズを的確にふまえた基礎を含む産業技術の世界的存在になり、産業界からも必要不可欠のものとされ、そこで働く全員が誇れるような存在になれることを祈念いたしております。